

清家委員長挨拶

2018年11月20日

ダイバーシティ就労研究フォーラム第1回全体委員会

ダイバーシティ就労支援研究プロジェクトの発足に当たり、全体委員会座長として一言申し上げます。

何らかの事情で働きづらさを抱える人々は日本にもたくさんおられます。こうした方々が就労することで、御本人はもちろんまわりの方々の幸福度も高まります。つまり、多くの働きづらさを抱える方々を就労につなげることは、これからの日本社会全体の幸福度を高める、そうした大きな可能性があると思います。就労そのものの幸福への関与だけでなく、こうした就労は、社会保障の質を高めることとなります。地域社会の活力を高めることにもなります。結局それは日本経済全体の活性化にもつながります。

働きづらさを抱える方々に対するわが国の制度は、どの類型に入るかにより対応策が異なる、縦割りの支援制度となっています。これを、働くという側面から横断的にとらえようという本プロジェクトは、これまでにない新たなアプローチとなるのではないかと期待しています。今回の研究プロジェクトの全体委員会、企画委員会、各部会のそれぞれのメンバーは、専門的な見識を持った者と現場のエキスパートが揃った、心強い布陣となっています。こうしたメンバーの英知を最大限に活かして取り組んでいきたいと思っています。

私は、20年ほど前（1998年3月）、中公新書から「生涯現役社会の条件」という本を出しました。それは世界に類をみない高齢社会に突入しつつある日本で、働く意思と能力をもつ高齢者の活躍できる条件づくりを提言したものでした。しかし言うまでもなく活躍していただきたいのは、高齢者だけではありません。女性の就労を拡大することも大切です、障害者の方々の就労拡大も重要です。すなわち、高齢者、女性、障害者、さらにそれ以外の多くの働きたくても働きづらさを抱える全ての方々の能力を最大限いかすことです。

今、ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）が喧伝されています。私は、実は、「ワーク・ライフ・バランス」という言葉には、すこしばかり違和感を感じます。ワークもライフの一部であり、働くことはライフを豊かにする大きな条件だと考えているからです。他方、ソーシャル・インクルージョン（社会への包摂）は重要なキーワードだと思います。ソーシャル・インクルージョンとは、すべての人が社会の一員となることです。働くことに障害を抱える人も、そうでない人も、その力に応じて自立し、自助し、社会に貢献することです。このことが、個人の幸福の大きな要素です。

このような社会を考えると、今の日本には、好条件が2つ出てきています。一つは、人手不足。適度な人手不足は、職場環境の改善、働く人々の能力開発を促します。もう一つは、第4次産業革命の到来です。IT化やロボット化の進展は、雇用を奪う面もありますが、人手不足の下では、高齢者や障害のある人々など働きづらさを抱える人々の能力を活かすという大きな可能性を秘めています。私はここに期待を抱いています。

ILO（国際労働機関）は、来年2019年、創設100周年を迎えます。そして、創立100年を迎えるにあたり、仕事の未来を考えるための仕事の未来世界委員会というのを立ち上げました。仕事の世界における将来指針を考えていこうというもので、ILO加盟国から20名ほどの専門家を集めてこれまで4回にわたり、経済社会の大きく変わる中で、より良い仕事の未来を実現するにはどうしたらよいかについて、現在議論を進め、来年初め目途に報告書を取りまとめております。来年6月に予定されている100周年記念ILO総会では、こうした世界委員会での議論の成果などをもとに、仕事の世界に指針を与える100周年記念宣言が採択されることになっています。私は、仕事の未来世界委員会の委員となつていますが、この将来の仕事の指針案の中にも、ディーセントワーク、日本では通常、働きがいのある人間らしい仕事と訳されていますが、ディーセントワークをすべての人に保障するというメッセージを込める予定です。多くの働きづらさを抱える方々に就労の場を提供するサポートを本格的に考えていこうという今回のプロジェクトは、このILOの考え方を具現化する試みだと思えます。その意味で世界の潮流にも合致したプロジェクトであり、ぜひ成功させたいと願っています。

みなさまのご協力を強くお願いする次第です。よろしく願いいたします。